急務デアリマセウト考ヘマス、一日モ早ク是ハ著手シナケレバナラヌ事業デアラウト考ヘマス、ドウゾ此建議案ハ貴族院ノ全院一致デ可決致シマシテ速ニ政府ニ送リ政府ニ於テモ之ヲ採用サレル樣ニ希望致シマス

參照第二〇

朕震災豫防調査會官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治二十五年六月二十五日

内閣總理大臣　伯爵松方正義

文部大臣　伯爵大木喬任

勅令第五十五號

震災豫防調査會官制

第一條　震災豫防調査會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ震災豫防ニ關スル事項ヲ攻究シ其施行方法ヲ審議ス

第二條　震災豫防調査會ハ事務ノ整理ニ必要ナル諸規則ヲ定ムルコトヲ得

第三條　震災豫防調査會ハ左ノ職員ヲ以テ之ヲ組織ス

一　會長　一人

二　幹事　一人

三　委員　二十五人

第四條　會長ハ勅任官ヲ以テ之ニ充ツ委員ハ理學及工學專門ノ者ヨリ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

幹事ハ委員ノ内ヨリ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第五條　調査上必要アルトキハ震災豫防調査會ニ臨時委員ヲ置クコトヲ得

臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

第六條　會長ハ震災豫防調査ニ關スル一切ノ事務ヲ總理ス

第七條　幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ掌理ス

第八條　震災豫防調査會ノ職員ニハ一ケ年三百圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得

但特別ノ調査ヲ擔任シ勤勞著シキモノアルトキハ本條制限以外ノ手當ヲ給スルコトヲ得

第九條　震災豫防調査會ニ書記ヲ置ク上官ノ指揮ヲ承ケ議事ノ筆記及庶務ニ從事ス書記ハ定員三人トシ文部屬ヲ以テ之ニ充ツ

第十條　調査上必要アルトキハ會長ハ臨時雇員ヲ使用スルコトヲ得

改　正

明治二十六年八月二十六日勅令第九十號ヲ以テ左ノ通改正ス

明治二十五年勅令第五十五號震災豫防調査會官制第九條中定員「三人」ヲ「二人」ト改ム

（參照第三）

豫テ御囑託ヲ受ケタル明治廿四年十月廿八日尾濃地方大震ノ爲メ鐵道線路ニ生シタル震害及復舊工事報告書調製圖面十八葉撮影畫貳枚ヲ添及提出候也

明治廿六年五月三十一日

震災豫防調査會委員工學博士　原　口　要

震災豫防調査會長理學博士　菊　池　大　麓　殿

東海道鐵道線路震害及復舊工事報告書

（此ノ報告書ニ添ヘタル圖面拾八葉及撮影圖二枚ハ報告ノ眼目トモ稱スヘキモノナレトモ都合アリテ此ニ掲クルヲ得ズ）

明治廿四年十月廿八日尾濃地方ニ起リタル大地震ノ爲メ東海道鐵道線路ニ損害ヲ生シタル區域ハ靜岡大津間幹線延長貳百哩幷ニ大府武豐間枝線延長拾貳哩餘米原金ケ崎間枝線延長三十一哩ニ亘リ就中被害ノ大ナルハ大府大垣間及大府武豐間ニ在リテ築堤諸所陷落シ其深キハ拾貳呎ニ達シ路盤全面ニ龜裂ヲ生シ其裂口ノ大ナルモノハ尺餘ニ及ヒ橋梁ハ木曾、長良、揖斐ノ三大橋ヲ始メ破壞ヲ生シタルモノ枚擧ニ遑アラス其他各停車場建造物ノ破損モ亦夥シトス今其重ナルモノニ付被害ノ狀況復舊工事ノ方法ヲ叙述スレバ左ノ如シ

線路

線路築堤中陷落龜裂ノ著シキ箇所ハ名古屋ノ北方枇杷島川鐵橋前後貳拾貳鎖間其陷落ノ最深七呎餘及ヒ木曾川鐵橋前後四十五鎖間其最深拾三呎餘長良川鐵橋前後三十七鎖間其最深拾貳呎揖斐川鐵橋前後三十九鎖間其最深六呎餘ニシテ其他三呎乃至四五呎ノ陷落ヲ生セシ箇所ハ殆ント五拾哩ノ延長ニ達セリ又築堤上龜裂ノ方向ハ縱横定リナシト雖特ニ縱裂（軌道ニ並行シタルモノ）ノ方最モ多ク且大ナリシ

大府武豐枝線ニ在リテハ築堤中陷落ノ著ルシキ箇所ハ大府龜崎間其最深五呎英比川鐵橋前後貳十鎖間其最深七呎成岩入江鐵橋前後五鎖間其最深三呎神戸川鐵橋前後貳鎖間其最深四呎ニ及ヒ其他五六吋ヨリ壹貳呎ノ陷落ヲ來シ又ハ路面ニ龜裂ヲ生シタル箇所ヲ總フレハ其延長殆ント八哩ニ達セリ

築堤ノ陷落シ又龜裂ヲ生シタル所ハ一旦其土砂ヲ取除キタル上漸次搗上ケ不足土ヲ補充シ總テ原形ニ倣ヒ築造セリ

線路陷落或ハ龜裂ノ爲メ砂利モ亦陷沒シ且軌條ハ屈曲シテ